

# 東京日々新聞

八百六拾五號



日向国高千穂山へ  
神代の古蹟あり此山中の  
高千穂村の素より頑固土地  
ありて人の心も直からん米を  
るるて常不食ふ物  
粟稗のともはし其村内の農民も  
儀太郎と呼者ありし妻は過一日と去  
りて独り籠り暮らさる又此近傍へ折々  
来て古衣高小女や儀太郎来て知己あり  
しや明治七年四月の上旬或日晩景彼の女  
風来て泊り

儀太郎

と依頼  
心能承知て其夜女を殺害  
所持の金銭品物を  
奪取とも四隣に入  
速く離れ一軒家  
誰知る人も嵐あり



萬壽  
方樂  
製

實に心を痛き人心  
無愁のつも愚る。夫より半月余もして此村内の  
飼犬の斬首啜て来る人々驚き其所此所と珍家  
あるは儀太郎の腕の後に見馴るる女の死骸を荒れ

温克龍吟誌

墨陀西岸  
見出て俄に懸懸へ  
訴ふて即持儀太郎へ  
挿縛ぬ嗚呼我神國の徳もや  
天此天を以て先徒を隠忍と亮然  
と此のハ恐るる又尊茶びき  
事しこせ

甲辰具足庵

彫春